
時間を忘れた君と僕

湯浅なりゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時間を忘れた君と僕

【Nコード】

N6831Z

【作者名】

湯浅なりゆき

【あらすじ】

ここは時の流刑地。時間という概念が消え失せたこの世界で、少年と少女は出逢い、無限のしがらみから脱する方法を模索する。死にたくても死ねない。じゃあ、どうすれば僕たちは死ぬことができるのだろうか？

？（前書き）

トリガーフラワーより先に書いた中編小説です。電撃Pで全16ページ。見開き8ページでございます。通勤、通学のついでにぜひどうぞ。

？

目を開けた。

立ち上がる。また、昨日と同じ一日が始まった。

どこまでも続く地平線。僕が立っているこの地に起伏はなくて、灰色の柔らかい土のようななにかが敷き詰められている。掘ることはできないし、掬うこともできない。ただ平坦に平等に、永遠と続く地平線の先までそのなにかは広がっていた。

辺りを見回してみても目に映るのは地平線だけ。建物も、山も、谷も、人も、ここには僕以外にも存在しなかった。

太陽も月も昇らないくせに、僕の頭上は藍色の空で覆い尽くされていた。どこから光源が発されているのかわからないけど、歩くのに困らないほどには明るかった。

目を瞑ると、まるで夜闇の中に投げ込まれたように瞼の裏は真っ暗になる。てつきり夜になったのかと思ってまた目を開けてみても、そこにはいつもと変わらない空があるだけだった。

僕はおもむろに自分のお腹に手を当てた。

僕のお腹が空腹を知らせなくなってから、どれくらい経っただろうか。

不思議なことに、僕はお腹が空かないのだ。そこまでたくさん食べる方じゃなかったけれど、だからといってこんなにも長い間にも食わずにいられるわけがない。どうやらこの世界では食事というプロセスがごっそり抜け落ちているようで、もちろん喉だって渴かないから、水もいらなかった。それでも、死ぬことはできなかった。覚えている最も新しい記憶は、僕が人を殺めたということだ。

殺したのが誰だったのかも、どうやって殺したのかも、一切覚えていない。

気付いた時にはもう、ここにいた。生前、と言っているのか、と

にかく僕はそんな不安定で僅かな記憶だけを持った状態で、ここに立ち尽くしていた。

ここ、とはどこか。

概念だけがある。こういうものだという認識が、まるで生まれながらにして持っていたかのように、頭にあっただ。それを知る機会は今全くなかったはずなのに、僕はそれを知っていた。まるで脳みそに情報をインプラントされたようで、なんとなく気持ち悪かった。

その情報によると、ここは流刑地らしい。人を殺した人間が流される、罪人の地。ここでは時というものがなくて、朝は来ないし、夜もない。歳は取らないから寿命も来ない。ただ永遠に、なにもない空間で生き続けなければならぬ。

気が狂いそうだった。だってもう、どれくらい経ったかわからない。最初は日付を記録していたけど、どうせ時間がわからないからってやめたのだ。やめてから、体感では千年くらい経っているような気がするけど、実際はどうなのかわからない。

でももし千年も経っているんだとすれば、そろそろ許してくれたっていいだろう。殺人を犯した僕は確かに重罪人かもしれないけれど、それでも千年はやり過ぎだ。

そんな風に思ったのも、ずっと前。今じゃ歩くのも億劫で、僕はここで寝て起きてを繰り返す。案外、持つものだ。僕が辛抱強いからかもしれない。他の人だったら、今頃気が狂っているのかも。

だけど、ここではそれが正解だ。気が狂えば、自殺ができる。自分の喉を引き裂いてもいいし、舌を噛み切ってもいい。とにかく、その激痛に堪えうるほどに気がふれていれば、ここから出ることができるはずだ。

僕にはできなかった。何度も首の動脈を爪で抉ろうとした。何度も舌を噛み切ろうとした。でも、正気を保ち続けている僕だからこそ、そんなことはできなかった。

僕は地面に寝転がって、目を瞑る。

せめて誰かがいてくれればいい。そうすれば僕は、そう、僕は。

……。
違和感が瞼を撫でて、僕は跳ね起きた。

ここには音がない。風も吹かないし、物がないから、音が立たないのだ。唯一音があるとすれば、それは僕の足音。このなんだかわからない柔い地面を踏み締めた時だけ、音が響くのだ。

だから、寝ていた僕がその音を立てることはできない。

でも、音がした。確かに、誰かの足音が僕の耳に触れたのだ。

「だ
」

声なんて出すのは久しぶりだったから、喉の使い方がわからない。落ち着いて深呼吸して、ゆっくり発声のやり方を思い出す。

「あ、あ
」

大丈夫。僕の喉は正常だ。耳もうまく機能してるし、言葉だって覚えてる。

「誰かつ
」

だめだ。小さすぎる。もっと大きな声で、そう、こんなふうに、お腹から声を出して。

「誰かつ、いるんですかつ！」

脳蓋にまで自分の声が響いてきて、ぐわんぐわんと眼の前が揺れた。反響を起こすような障害物がないので、僕の声はどこまでも真っ直ぐに、この世界の隅々にまで行き渡った、ような気がする。

返事を待つ。

それまでの間、どれだけ緊張したろうか。指はかじかんだように震え、声を出したばかりの口は閉じることができなかった。水も飲んでいないのに、僕の額からは冷たい汗が滲み出る。

瞬きの回数を数えた。

その数が三桁を超えた時、僕の耳に、僕以外の声が届いた。

？

その影が見えるまで、長かった。お互いに叫び合って、位置を確認しながら歩き続けた。途中から声はつきりと聞こえるようになって、その持ち主が女性だと知る。どんな子だろうと胸を踊らせて、まだまだ歩いた。

だから僕の視力で彼女の姿を捉えられた瞬間の高揚感は、異常なまでに高かった。興奮し過ぎて頭が熱くなっただし、たぶん涙も流してた。

だって、やっと見つけたのだ。

この変わらない世界にあった、違いというものを。

「おい！」

僕の呼び声に、声が返ってくる。

走った。とにかく全速力で駆け抜けた。彼女にいち早く会おうと、地を蹴り続けた。

たぶんそれは相手も同じだったようだ。お互いに姿を確認できてから僕たちが会おうまで、それほど時間はかからなかった。

息が切れることはなかった。疲れることもなかったから、もっと早くから走れば良かったと後悔する。

僕の数メートル先に、彼女は立っていた。歳はたぶん、十六、七くらい。それは見た目が、というだけで、実際、この流刑地に来てからどれくらいが経ったのかは、わからなかった。

僕はゆっくりと、彼女に近づいて行く。

人だ。やっぱり、造り物じゃない、血の流れている人間だ。

「あの、君は」

尋ねると、彼女もまた口を開いた。

「あなたは？」

瞳の色は青だった。髪の毛は栗色で、顔立ちも整っていた。日本人だろうけど、それ以外の血も混じっている。ハーフか、クォータ

「か。」

それなのに、なんだかやけに親近感が湧いた。既視感、とでもいうのか、彼女とは、ここで会ったのが初めてではないような気がしたのだ。

「名前は、忘れちゃった。君は？」

僕はそう答えた。名前なんて覚えてない。誰かが最期に僕を呼んだ、その口の動きだけは覚えている。イ音が一つと、ア音が一つで一番後ろにウ音が一つ。

たぶん、そんな名前だ。

「わたしも忘れちゃった。大切にしてたんだけど、ここじゃ、必要ないから」

その通りだ。

だって、名前というのは人を区別するために使うのだ。一人しかいなければ、そんなのは全く必要ない。

それはまた、二人でも同じこと。

「走って疲れたでしょ。座ろうよ」

「うん。ありがとう」

もちろん、お互いに疲れてなどいないことは明白だった。あと百キロ走れと言われても余裕でマラソンできてしまう。永遠に走ったって、息切れは起こさない。

僕の隣にちょっとだけ距離を置いて、彼女は腰を下ろした。

「あのさ、ここにどれくらいいるの？」

「わかんない。でも、わかんないくらいには、いる」

「僕もだ。よく平気だね。普通なら、気がふれちゃうでしょ」

そんな言葉に、彼女は笑い出した。

「じゃあ、あなたはどのなの？」

「僕は、平気だった。君もそうなんだ」

彼女は頷いた。

そうして、話題が途切れてしまった。そもそも話なんて思い浮かぶわけがない。だって僕は、生前のことなんてもうとっくに忘れて

しまっているのだ。それは彼女もそうだろうから、テレビの話も、趣味も、勉強の話題すらできない。

ゆえに僕たちは、そこにたどり着く。

「あのさ」「あの」

声が重なって、僕はびつくりしてしまう。その瞬間、彼女の言いたいことが伝わってきた。きっと、僕と同じだろう。

僕たちはお互いに微笑んで、しばらくしてからまた話を切り出した。

「あのさ、お願いがあるんだ」

「わたしも。じゃあ、あなたからどうぞ」

そんな彼女の言い方は、すでに僕の願いを理解している風だった。だから僕は、その言葉をためらうことなく、口にすることができた。「僕を殺してくれないかな？」

なんでもいいから、僕を殺して、と。

そのために僕は、君との出会いを祝福したのだから。

「うん。わかった」

彼女はすぐにそう答えた。「でも」と付け足して、さらに続けた。

「代わりに、わたしの願いも訊いて」

僕はゆつくりと頷いた。

彼女は深呼吸をして、抑揚のない声で、言った。

「わたしを殺してほしいの」

僕らは互いに見つめ合って、どちらともなく笑い出した。お腹を抱えて、転げまわるほどに笑った。彼女も目尻に涙をためていて、足をばたつかせていた。僕たちは二人しかいないこの世界で、大きな声で笑い合った。

「おもしろい。やっぱり、同じなんだね」

彼女は指先で涙を拭いながら、そう呟いた。

「うん。だって、そうじゃなかったら僕は君に会おうとしなかった」「酷い言い草だった。でも、彼女はにこやかに繰り返した。

「わたしも、あなたに会おうとしなかった」

つまりは、そういうこと。

僕たちは互いに、早くここから出たいのだ。永遠に循環する、生を奪われたこの退屈な世界から、とつとと抜け出したいだけなのだ。でも、哀しいかな僕らは正常だった。

気が狂うことができなかった、そんなイレギュラー。

だから、他人任せ。自分でできないことは、誰かにやつてもらえばいい。

「でも、どうしようか。僕が君を殺したら、君が僕を殺せない」

「うーん。どうにかして一緒に死ぬことはできないのかな。互いに首を絞めあう、とか」

想像して、苦笑する。なんだその光景。あまりに滑稽だ。

「それじゃあ僕に部が悪い。僕は男だし、たぶん君よりは力も強いよ。だから、君が先に死んじやうかもしれない」

「そう。あーあ。縄とかあれば楽なんだけどね」

「縄があれば、僕らはこうやって会うことなんてなかったさ。カッターでも、鉛筆でも、今じゃ文房具のひとつすら惜しいくらいだよ。こんなふうには誰かと楽しく会話できるなんて、ちょっと前には思いもなかった。彼女と二人なら、少しは変わるかもしれない、なんてことを思っただけど、すぐに払拭した。

だって結局、またしばらくしたら戻ってしまうんだ。彼女と二人の今が、いつもになってしまう。そうすれば代わり映えのない毎日が繰り返されることになって、堂々巡りだ。

「ねえ、なんであなたは自殺しなかったの？」

突然にふられた話題に、僕は少しだけ頭を悩ませた。自殺をしなかった理由なんてないよ。ただ、できなかっただけ。

「怖かった、のかな。だってほら、痛いじゃん」

そんな適当な回答を聞いた彼女は、また笑顔になった。

「わたしもっ。爪切らないままここに来ちゃったみたいだから、簡単に死ぬると思ったんだけど、だめだった。指をこうやって」彼女は自分の首筋に人差し指を突き立てた。「ぐって力を入れてみるん

「ただ、痛くなってやめちゃうの。よかった。わたしだけじゃなかったんだ」

「くだらないことで、僕は共感し合った。彼女が笑った理由がわかった。嬉しかったのだ。こうして、誰かと感覚を共有できるってことが。」

「舌を噛み切ろうとしたら、口内炎ができてたの」

「それはここに来る前からあったやつ？」

「うん。わたしもここじゃ病気にはならないんだって思ったから、びっくり」

「治った？」

「すぐに。寝て起きたら痛みは消えてた。なんだったんだろうね」

「彼女は優しくはにかなだ。僕もつられて、顔の筋肉が弛緩してしまっ。」

「ふう」

「それじゃあ、どうしよつか。」

「彼女のそんな独り言は虚空に誘われて、どろどろの絵の具をぶちまけたような藍色の空に飲み込まれていった。」

「この空が質量を持って僕らの上から落っこちてきて、押しつぶしてくれれば楽なのに。」

「叶わぬ願いは、僕の胸の中ではつりと浮かんで、消えた。」

「世間話、なんて柄じゃないけどさ。君はどうしてここに来たのか、覚えてる？」

「僕は忘れちゃったんだ。そう付け加えると、彼女は首を横に振って、答えた。」

「わたしも、忘れちゃった。でも、ここに来る前にわたしは誰かを殺した。あなたもそうでしょう？ じゃなきゃ、ここにいない」

「うん。でもその誰かは、思い出せない」

「うん。その殺し方も、動機も、わからない」

「なのに僕は、ここにいる。罪人として、永遠の時を生き続けている」

罪の記憶を忘れてしまった咎人なんてあつてたまるものか。反省もできないし、償うこともできない。もしかしたら、僕らがそんなんだから、神様は怒ってしまったのかもしれない。それゆえに僕は、ここを出ることができない。

「やっぱり、僕たちには自殺しかないよ」
僕らは結局、そこに回帰する。

罪の記憶を取り戻すことはもう絶望的だ。だから、死ぬしかない。この円環する世界を抜け出すには、死ぬしか方法はないのだ。
「痛いのは、やだ」

彼女は子供が駄々をこねるような口調で、そう呟いた。
僕もそこには同意する。だけど、現実はそのないうまくはいかないだろう。

「少しは、我慢しなくちゃ」

「わかってる。自分でやらないだけ、ましだよね」

「うん。それじゃあ」

僕は自分の歯を指で叩いて、その指で彼女の手首を指し示した。
「なに？」

「お互いに、手首をこう」僕は自らの手首を口元に持って行って「噛みちぎる。そうすればほら、出血とかで、死ぬるんじゃないかな」
「……できるかな、そんなこと」

彼女の不安も最もだった。でも。
「だってそれしか方法はないよ」

もしかしたら、もつとうまいやり方があるのかもしれない。僕らが双方ともに傷つかず楽に死ぬる。あるいは死なずに済むことだつてできるのかもしれない。

でも、僕にはもうそれしか思いつかなかった。

とにかくここを出たい。僕を突き動かすのは、その一心だけだったから。

「で、でも。ただ手首を切っただけじゃ死なないかもしれないんですよ？ 血が出なくなったり、固まったり……もしそれで、どちら

かが死んでどちらかが生き残るなんてことになったら」

僕らのどちらかが生き残り、生者は待ち望んだ他人^{ひと}を失う。それが最悪の結末だ。だってそうだとしたら、僕らのどちらかは人を再び殺めてしまったという記憶を深く頭の奥に刻みつけて

「……………」

ふと、僕の脳裏をなにかが過ぎった。同時に鋭い頭痛に襲われて、とたんに目の前がぐらついた。それだけで、全身を駆け抜けた違和感と不快感は一瞬のうちに消え去った。

「どうしたの？」

隣にいたはずの彼女の声が、遠くに聞こえる。

僕は慌てて横を向いて、彼女がそこに変わらず座っていることを確認した。胸をなでおろして、息をつく。

「いや、なんでもない」

自分でもわからないことを、彼女に説明できるはずがない。でも今僕は確かに、なにかを思い出そうとしていた。それがなんなのかは、わからないけれど。

「ごめんなさい。わがままいっちゃ、ダメだよ。わかった。やるう？」

彼女はそう言って、そつと僕の手を取った。そして、もう一方の手を僕の太ももの上に差し出した。

僕は頷いて、彼女の細く、雪のように真っ白な腕を掴んだ。陶器のようになめらかな肌触りで、僕の指先から伝わってくる温かさは間違いなく生命の温もりだった。脈に指を這わせて、その鼓動を確認する。とくん、とくと、彼女の脈拍が徐々に早くなっていくのが実感できた。

怖いのだ、彼女も、きつと。

僕だって怖い。彼女だって僕の脈に触れて、同じことを思っただろう。

できることならこんなことはしたくない。いいじゃないか、このままで。そんな悪魔の囁きが胸の中を埋め尽くす。アダムとイブと

でも洒落込んで、僕らでこの世界を創り上げていけばいい。子供を産んで、僕らは親となって、またその子供が子供を産んで、僕らに孫ができる。ひ孫ができる頃にはもう床に臥していて、たくさんの家族に看取られて最期を終える。もちろん隣には、今と同じように彼女がいて。

ちくりと、腕に痛みが走った。

彼女が犬歯を僕の手首に立てている。彼女の桜色の唇から漏れる熱い吐息が、僕の肌を優しく撫でた。

痛ましそうに表情を陰らせて、目を瞑ったまま僕の皮膚に歯を食い込ませている。そんな彼女を見ていたら、僕の甘い考えはすべて吹き飛んだ。

僕も彼女の手首に歯を立てた。小さな脈動が、僕の唇に訴えかけてくる。やめて、殺さないで、まだ生きているのに、どうして殺すの？

僕は答える。だって僕らにはもう、これしかないんだ。そう言ったのは誰でもない、この僕だ。彼女にだけ重荷を背負わせて、一人だけ逝くわけにはいかない。僕らは一緒に死ななければならぬ。どちらかが生き残るなんてことは、あつてはならないのだ。

どうして？

唐突に浮かんだそんな疑問を、僕は彼女の皮膚と共に前歯で噛み潰す。ぶちぶちという嫌な感触がして、僕は咄嗟に目を瞑った。両手が使えたら、耳も塞いでやりたかった。鼓膜を震わせる彼女の小さな悲鳴が、僕の決意を揺るがせる。でもその逡巡を、さらなる痛みが絶ち切った。彼女が僕の手首を噛みちぎったのだ。僕はほぼ反射的に、顎の力を強めてしまう。滔々と溢れてくる彼女の生きた証が、僕の口内を鉄の味でいっぱいにした。

僕の手首から、魂が抜け出ていくような錯覚を覚える。痛いというよりも、ずっと変な感覚だった。すでに味覚はなかった。さつきまで彼女の味を感じていたはずの僕の舌は、もう麻痺して機能しなかった。

ついに意識までもが混濁してきた。

なにをしていたんだっけ。僕は自分に問いかける。そう、僕は今、なにをしていたんだろう。無心に顎を動かしているけれど、僕が今やっていることはなんなのか。それに、この痛みはどこから来るの。僕の脳みそをぐちゃぐちゃに掻き回すこの激痛は、いったいなにがどうなってるの。

なにもわからなかった。世界がとても小さくなっていく。今この世界には僕しかいなくて、それ以外には地も、空も、空気というものすら存在していない。限界まで収斂したこの世界はとっても居心地が良くて、まるでゆりかごに乗っているようだった。

ふ、っと痛みが消えた。これで幾分も楽になった。僕は全身の力を緩めると、そのまま真っ暗な世界に身を投げた。そこは深い海のようにだった。どっぴりと、僕の身体を優しく包んでくれる。緩慢な速度で、ぬるい海を沈んでいく。どこまでも深く、どこまでも暗い海の中で、僕はただ一人だった。

なんとなく重たい瞼を持ち上げると、瞬く間に世界が着色された。目の前に広がる藍色の景色、視界の端にちらつく、真っ赤ななにか。そんなめちゃくちゃな落書きが施されたカンバスに、僕はいた。

ずっと高く、遠くから、僕を見る人たちがいる。彼らは飾られた絵である僕を眺めて、笑っていた。もつとうまい絵を描けと、口々にそう言った。仕方ないだろう。だってこうするしかなかったんだ。僕にはもう、これしかやり方はなかったんだから。

それでもうるさい嘲笑は止まなかった。なんだよ、そんなにおかしいか。僕のやったことは間違いだったとでもいうのか。こんな絵じゃ認めないって、お前らは嘲け笑うのかよ。

そいつらの一人が絵を、そこにいる僕を指さして、まるで子供を叱りつけるような厳しい口調で、言った。

やりのおし、と。

そんな一言が耳に届いて、僕はすべてを思い出した。

この世界のルールはなんだったか。

僕が、そして彼女がこの世界にいた理由は、なんだったか。

誰かを殺したから　僕らはこの流刑地に墮とされたのだ。

僕は身体に力を込めた。どうして、どうしてこんなことに気付かなかったのか。今すぐにも起き上がらなければならぬ。そうしなければまた、あの長く果てない永遠を過ごすことになる。

いやだ。そんなのはもういやだ。せつかく開放されると思ったのに。僕はやっとこの世界から出ることができると思ったのに。なんのために痛い思いをしたんだ。なんのために彼女を苦しめたんだ。それをまた繰り返し返せとお前らは言うのか。

ふざけるな。

声にならない声を上げる。でも僕の身体機能はもうほとんど止まっ
つていて、指先一本すら動かすことができなかつた。

僕の意識が空に飲まれていく。時を忘れたこの世界に、僕のすべてが攫われる。

やりなおし。

その言葉を噛み締めて、僕は。

目を閉じた。

Re:?

同じ過ちを何回繰り返したのだろうか。きっと、数では表せないくらいには失敗し続けたはずだ。何度も、何度も、僕は彼女を殺して、彼女は僕を殺した。そうしてこの世界の理ことわりに従って、僕らはまたやり直す。

そう。だからこれは、その数え切れない失敗が生んだ、奇跡。たった一回の、成功のお話。

*

「血が出なくなったり、固まったり……もしそれで、どちらかが死んでどちらかが生き残るなんてことになったら」

僕らのどちらかが生き残り、生者は待ち望んだ他人ひとを失う。それが最悪の結末だ。だってそうだとしたら、僕らのどちらかは人を再び殺めてしまったという記憶を深く頭の奥に刻みつけて

「あ」
刻み付けて、また、忘れて、同じことを、繰り返す。

そうだ、僕は、今までに何度もこの光景を見たことがある。彼女と出会った時に覚えたあの既視感は、僕の封印された記憶だったんだ。彼女と会うのは初めてじゃない。何度も何度も、出会ったはずだ。その度に僕らは互いに殺し合って、この世界に来る条件である『人を殺した罪』を負って、再びここに墮とされる。

彼女が怪訝な表情を浮かべて、僕を見つめてくる。そして突如として、彼女はその細くしなやかな指を、僕の目元に押し付けた。

「なっ」
驚いた僕は後ろに下がってしまう。

すると彼女はその指についたなにかを凝視して、勢い良く顔を上げた。

「あっ、あ」

その指についていたのが僕の涙だと気付いた時にはもう、彼女は泣き崩れていた。両手で顔を押さえ、声を上げて泣いている。

「思い出したんだ」

背中を丸めて嗚咽を漏らす彼女に、僕は訊ねた。

「うん。ぜんぶ、思い出した」

途切れ途切れの声でそう答えた彼女は、そつと僕の手首を取った。そしてそのまま、僕の手首を自分の口元まで持って行って、ぎゅつと、握り締めた。

「ごめんね、痛かったよね」

熱い吐息が僕の肌を撫でる。彼女に握られた僕の手首は、激しく脈動していた。それをきつと、彼女も感じ取っている。僕らが生きているという証を、しみじみと受け止めている。

「ううん」

見えていないとわかっていたけれど、僕は首を振った。

なんで君が謝るの。謝らなくちゃいけないのは、この僕だ。

「ごめん」

それから僕は、彼女が落ち着くまで待ち続けた。彼女の温もりを直に感じながら、僕は藍色に染まった空の果てを、遠く見上げていた。

Re...? (完) (前書き)

いねいおごまごいす。

Re: : ? (完)

「どうしょっか」

彼女の質問に、僕は答えることができなかった。

その答えが用意できないからだ。だって僕らは、自殺する勇気がない。そもそもなんにもないこの世界で、自殺なんてできっこないのだ。

でもだからといって、互いに殺し合ったらまた繰り返すことになる。僕らの記憶はリセットされて、また同じストーリーをなぞってしまう。

どうすればいい。

僕らはどうすれば、あいつらに一矢報いることができる？

やっぱり、僕らはここに

「ここに、住んじゃおっか」

「え？」

心が読まれたのかと思って驚いた僕は、彼女の方を向いた。すっかり泣き止んではいたけれど、彼女の目はまだ赤く充血していて、頬にも水滴のたどった筋が伸びている。

僕と目が合った彼女は咄嗟に、渴いた笑みを浮かべてみせた。

「う、うそうそ。なんでもない。忘れて」

そう言っつて、彼女は両膝の間に顔をうずめてしまう。でも、隠れていない耳が真っ赤に染まっていたのを見て、僕は吹き出してしまった。

僕が腹を抱えて笑っていると、顔を上げた彼女は不満げに頬をふくらませた。

「な、なんで笑うのっ」

力強い彼女の問いに、僕は笑いながら答えた。

「だって、僕と同じこと考えてるんだもの。そりゃあ、笑っちゃおうよ」

「同じことって……えっ、えっ？」

顔を赤らめてうるたえる彼女の、その掌の上に僕の手を重ねて、告げた。

「二人でここに住んじゃおうか、って ……あ、うっ」

言ってる途中で、あまりの恥ずかしさに僕の方が根負けしてしまった。この空気、なんだかプロポーズでもしているみたいじゃないか。

やっぱりなし、僕がそう口にしようとした直前に、彼女は僕の手を握り返した。

そして、これ以上ないっくらい満面の笑みを浮かべて、力強く答えてくれたのだ。

「いいよ。ずっと、一緒にいよう」

陽炎のように儂い幻想なのかもしれないけれど、その時、僕たちはそう誓った。

ずっと一緒にいよう。

その言葉は僕の心の隙間にぴったりと、はまった気がした。

*

長くは続かないと、わかっていた。僕らは結局、その時を引き伸ばしたに過ぎない。アダムとイブなんて、そもそも不可能だったのだ。

時が止まった世界では、子供が生まれることはなかった。それに気付いてからの僕たちは、ただ暇を潰すためだけに身体を重ねた。やることがないから、意味のないセックスを続けた。

もう、なんのために僕らは一緒にいるのか、そんな理由さえわからなくなっていた。

結局、僕らの夢は夢のまま、叶うことはなかったのだ。

「どうしよっか」

そうしてまた、戻ってしまう。

それが定められた運命とでも言うように、僕らは同じことを繰り返す。

どこかで僕らを眺めているあいつらは、今頃また笑っているのだろうか。指を突きつけて、やりなおし、の一言を口にする時を待ち望んでいるのだろうか。

なんだよ、それ。

苛立った僕は自分の舌を思いつ切り噛んだ。舌を噛み切っても死ねないかもしれない。でも、あいつらを驚かせるくらいはできるはずだ。舌から滲み出る血をすすって、さらに力を強くする。

でも、舌に激痛が走るのと同時に、顎の力を緩めてしまう。

ほらね。

そんな風に、笑われた気がした。

「やっぱりまだ、自殺はできないんだ」

僕をじっと見つめていた彼女が、興味なさげに呟いた。膝に頬を乗せて、ほうとため息をついた。

「どうしよっもないよね。やり直す？ リセットして、一から。そうしたら、わたしたちもまた、あの新鮮な感じを思い出せるかもしれない」

新鮮な感じ。

僕らが初めて夜を共にした、あの日のように。

「……笑っちゃうよ。僕らは結局、なんにも成長していない」

「だって時間が止まってるんだもの。当たり前だよ」

彼女はそう言って、僕の肩に頭を預けてきた。

「わたしたち、ここじゃないところで出会えたら良かったのにな。そうしたら」と、そこで彼女の言葉は止まってしまった。

そうしたら、僕らはどうなっていただろうか。子供も産めただろうし、死ぬこともできた。もちろんどちらかが先立って、残された方や僕らの子供たちはその死に涙して悲しむ、そう、悲しむのだ。

悼まれない死など死ではない。
涙されない死など死ではない。

なんでこんな簡単なこと、忘れてしまっていたのだろうか。
人が死ぬということはつまり、そういうことだ。

人生はゲームじゃない。僕らのように何度でもリセットがきくのような人生は、生きているとは言わない。そして、死んでいるとも言わない。

死を望むなんて間違っている。

だって死ぬってことは、悲しいことなんだ。誰かが死んで、残された者はその死を悼み、涙を流す。先立つた人に再開を誓って、天へと昇る人を想う。

いつかわたしも逝くからね、と。

それが本当の、死というものだ。

僕らのやっていることは、間違っている。

「もしも、ここから出ることができたら、また違う世界に行けるのかな」

僕は彼女に訊ねてみる。

彼女はしばらく悩んだあとに、力なく微笑んで、答えた。

「わかんない」

「そう。僕もだ」

でも、ここにいちやいけない。

ここは僕たちから、死というものを奪い去る。死ぬって意味が、生きるって意味が、ここにいたらみんな、薄れてしまう。

だから一刻も早く、終わらせなければならぬ。

あいつらに一矢報いるためじゃない。これは、僕らが人間として『生きる』ために、やらなきゃならないことなんだ。

「僕は、君が好きだ」

そんな一言に、彼女は首をかしげた。

「どうしたの、突然？」

その疑問を無視して、僕は続ける。

「君の声も、瞳も、耳も、鼻も、髪も、口も、肩も、胸も、腕も、足も、手も、首も、涙も、汗も、血も、心も、考えも、思いも、願いも、優しさも、怒りも、悲しみも、そしてその笑顔も、ぜんぶ、ぜんぶ愛してる」

出会わなければ得ることのできなかった、誰かを愛するということ。

僕は、それを失いたくなかった。

彼女に、それを失ってもらいたくなかった。

「ねえ、あなたなにを」

「だから。ごめん。もう、終わりにしよう」

僕らの思いが、終わってしまいう前に。

僕らの世界を、終わらせてしまおう。

「なんで」

僕は彼女の肩を掴み、柔らかな地面に押し倒した。馬乗りになるようにして、彼女の首に手をかける。

「いやっ、なんで、やめてよっ」

彼女が僕の下で暴れだす。頬を引っかかれても、ぶたれても、僕はその手を離そうとはしなかった。

「わたしが死んだら、あなたはどうするのっ」

彼女は大きな声で叫んだ。僕は手に力を込めて、彼女の首を絞める。

「だから僕が、君の最期を看取るんだ」

「意味、わかんない、なんで、そんなことっ」

彼女の瞳には、久しぶりに涙が滲んでいた。ぼたりと、彼女の頬に水滴が落ちる。それは彼女の涙と混ざり合って、地面に落ちていった。

「君が大好きだった。愛してた。だから、だから」

彼女の口から言葉が消える。苦しそうなうめき声だけが耳に届いて、僕は唇を噛み締めた。でも、目は閉じない。耳だって塞がない。

これは、僕の罪だ。

僕が、ぜんぶ背負わなくちゃいけない。

「っ」

彼女の爪が、僕の腕に食い込んだ。皮膚に突き刺さった彼女の爪が、僕の肉を抉り取る。僕の血は腕を伝って、彼女の首を赤く染め上げた。それでも僕は、力を緩めなかった。

そんな時だった。

彼女の唇が弱々しく動いて、言葉を紡いだのだ。

その時の彼女は、僕の大好きだった笑顔を、振り絞ったように無理矢理作り上げた笑みを、浮かべていてくれた。

紡がれた言葉は、たったの五文字。

『ありがとう』

頭の中で彼女の言葉が囁かれて、それを境に、彼女は動かなくなつた。笑顔のまま、彼女はその生を終えた。

僕は息をついて、彼女の首から手を離す。僕の腕に刺さった爪を抜いて、彼女の手を下ろさせてやる。

やっと、終わった。

これで彼女は、この世界から開放された。

それに伴って彼女の身体が砂のように消える。みたいなことを想像していたのだけど、そんな童話じみたことが起きることはなかった。

彼女はそこにある。

息を引き取つてもなお、亡骸として、そこにあった。

「っ」

名前を呼ぼうとして、喉がつかえた。そうだ。僕らは名前前で呼び合っていなかった。互いを二人称で呼ぶ、ただそれだけだった。

だから僕は、彼女の名を叫べない。

冷たくなっていく彼女を見ながら、僕はなにも声をかけてやれなかった。

胸に穴が空いてしまったようだ。僕は、彼女を殺した。彼女はも

う、この世界にはいない。なのにその穴を埋めるために呼ぶ名前がない。

煮え切らない気持ちを、僕は慟哭することで吐き出した。息が切れるまで、喉が潰れてしまうまで、僕はずっと吼え続けた。地平線がぐにやりと歪む。それがこの世界が滅びる前兆なのか、それとも僕の涙なのかはわからない。でも、どちらにせよこの世界はもう朽ちてしまった。僕らの生み出した、僕らの世界は、もう、どこにもないのだ。

だから僕の声は、一人しかいないこの世界にずっと、ずっと広がっていく。その声は果てしなく、地平線を超えて、空という枠を超えて、ずっと果てまで、延々と。

ありがとう。

彼女の言葉を反芻して、僕はゆっくりと目を閉じた。

目を開けた。

立ち上がる。昨日とは違う一日が、始まった。

Re: : ? (完) (後書き)

死ぬ時は誰かに看取られて死にたい。それが私の夢です。そんな思いを具現した小説。細かい裏話とかはあんまりなし。

ここまで読んでくださった読者様、本当にありがとうございました。文体やストーリーが気に入ってくださったなら、ぜひ他の作品もどうぞ。

批評や感想なども受け付けております。できる限り返信はしたいと思っておりますので、読者様と共によりよい作品作りを目指していきたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6831z/>

時間を忘れた君と僕

2011年12月22日23時56分発行